

原文（掃葉山房刊『西遊真詮』）	西川満訳（戦後版）
卻說美猴王榮歸故里，自剽了混世魔王，奪了一口大刀，逐日操演武藝，教小猴砍竹為標，削木為刀，治旗幡，打哨子，安營下寨，頑要多時。	悟空はこのときふんどつた魔王の大刀を使つて、それから毎日、武藝の稽古にいそしんでいたが、
忽然靜坐處，思想道：「我等在此，恐作要成真，或驚動人王，或有禽王、獸王說我們操兵造反，興師來相殺，此等竹竿木刀，如何對敵？須得鋒利劍戟方可。如今奈何？」	家來の猿たちが、木ぎれや棒きれしかもたないのを見ると、 どうものたりなくてしかたがない 。「これでは、いざというときに役にたたぬ。手ごろな武器を、たくさん手にいれるくふうはあるまいか？」ともらすと、
眾猴聞說，個個驚恐。	
正說間，轉上四個老猴，兩個是赤尻馬猴，兩個是通背猿猴，走在面前道：「大王，若要鋒利器械，甚易。	尻のまつかな二匹の猿が 顔を見あわせて何やら相談していたが、
我們這山向面去，有二百里水面，那廂乃傲來國界。	「この山から東の方、海をわたつて二百里ばかりのところに、傲來國の都がありますが、
城中軍民無數，必有銅鐵等匠作。大王若去那里，或買或造些兵器，教演我等，守護山場，誠所謂長久之計也。」	そこには軍隊や市民がたくさん住んでおり、 金銀銅鐵 もかならず山ほどありましよう。大王さまには、さつそくそこへお出かけになつて、買うなり、つくらせるなり、なさつたならば、その武器によつて、わたくし共の山を、 じゅうぶん 守ることができると思います」
悟空聞說，滿心歡喜，急縱舢斗雲，霎時間過了二百里水面。果然那廂有座城池，六街三市，大小人家，甚是熱鬧。	せつちちな 悟空は、雲を呼んで 空にのぼり 、海上を二百里ばかり東へ走つた。なるほど大きな城がある。 しばらくのあいだ は雲の上から、 にぎやかな城の内 を見おろしていたが、
悟空想道：「這裡定有現成的兵器，我待下去買他幾件，還不如使個神通覓他幾件倒好。」	(新しい武器をこれからつくるよりも、いつそできあいを貰つて行つた方が便利だわい)とひとりうなずいて、
他就捻訣念咒，向巽地上吸二口氣，吹將去，便是一陣狂風，飛沙走石，	腹に手をあてて、ひといき吹くと、にわかに一陣の狂風がおこつて砂を飛ばし、石を走らせた。
風起處，驚散了那傲來國內軍民，街市都關門閉戶，無人敢走。	城の中にいたひとびとは、 われさきにと家の中に逃げこんで、門をしつかりとぎしてしまつた 。もはや路上には、人かげもない。
悟空才按下雲頭，徑闖入兵器館、武庫中，打開門扇看時，那裏面十八般兵器件件俱備。	悟空は悠々と雲からおり、兵器のかんぬきをはずした。戸をあけると、あるわ、あるわ、 武器がどつさり積んである 。
一見甚也道：「我一人能拿幾何？還使個分身法搬將去罷。」	「これはありがたい」

<p>即拔一把毫毛，嚼爛噴去，念咒叫：「變！」</p>	<p>と悟空はれいによつて、自分のからだからひとつかみの毛を抜いて口の中をかみ、パツと吐きだすと、</p>
<p>變做千百個小猴，都亂搬亂搶，搬個罄淨。</p>	<p>毛はたちまち千三百匹の小猿にかわり、武器の山にかけあがつて、手に手に劍やら槍やらを取つてはこびだす。</p>
<p>徑踏雲頭，弄個攝法，帶領小猴，俱回本處。</p>	<p>ころあいを見て、悟空はふたたび雲を呼び、小猿ともども武器をのせ、花果山めざして引きかえした。</p>
<p>猴王按落雲頭，將身一抖，收了毫毛，將兵器都亂堆在山前，叫道：「小猴們，都來領兵器。」</p>	<p>家來の猿たちに武器をあたえて、</p>
<p>眾猴都去搶刀奪劍，搥斧爭槍，扯弓扳弩，吆吆喝喝，耍了一日。次日，依舊排營。悟空會集羣猴，計有四萬七千餘口。早驚動滿山怪獸，各樣妖王，共有七十二洞，都來參拜猴王為尊。每年獻貢，四時點卯。隨班操演，隨節徵糧。齊齊整整，把一座花果山造得似鐵桶金城。日逐家習武演師。</p>	
<p>美猴王正喜間，忽對眾說道：「汝等弓弩熟諳，兵器精通，奈我這口刀着實狼狽，不遂我意，奈何？」</p>	<p>悟空はすっかり氣をよくしていたが、しばらくたつたある日のこと、いきなり自分の大刀を投げだして、「どうも、この刀はおもしろくない。おれにふさわしい何かよい武器はないものかなあ？」とつぶやいた。</p>
<p>四老猴上前道：</p>	<p>すると家來の中でも智慧のある一匹の猿が、すぐに答えて、</p>
<p>「大王乃是仙聖，凡兵是不堪用。但不知大王水裏可能去得？」</p>	
<p>悟空道：「我自聞道之後，有七十二般地煞變化，會觔斗雲有莫大的神通；善能隱身遯身，起法攝法。上天有路，入地有門；步日月無影，入金石無礙；水不能溺，火不能焚。那些於去不得？」</p>	
<p>四猴道：「大王既有此神通，我們這鐵板橋下，水通東海龍宮。大王若肯下去，尋着老龍王，問他要件兵器，卻不趣心？」</p>	<p>「大王さま、この橋の下の水は、まつすぐ東海龍宮に通じております。そこにはきつとりつばな武器がたくさんあると思いますが」</p>
<p>悟空聞言，甚喜道：「等我去來。」</p>	<p>「なるほど、そいつはよい考えだ」と悟空はうなずいて、</p>
<p>即跳至橋頭，使一個閉水法，捻著訣，撲的鑽入波中，分開水路，徑入東洋海底。</p>	<p>善はいそげ、とばかりに、橋からとびおり、分水の法をつかつて海の底にはいつていつた。</p>

正行間，忽見一個巡海的夜叉，擋住問道：「那推水來的，是何神聖？說個明白，好通報迎接。」	大きな昆布がゆらゆらとゆれている海底の林をとおつてゆくと、蛤にのつて警戒をしている巡海夜叉が見とがめて、「こら、その方は何ものか？」
悟空道：「吾乃花果山天生聖人孫悟空，是你老龍王的緊鄰，為何不識？」	「おれは花果山の天生聖人、孫悟空だ。よく覚えておけ」
夜叉聽說，急轉水晶宮傳報道：	夜叉はおどろいて蛤のふたとじ、全速力で水晶宮にかけつけ、東海龍王に報告した。
「大王，外面有個花果山天生聖人孫悟空，口稱是大王緊鄰，將到宮也。」	
東海龍王敖廣即忙，出宮迎道：「上仙請進。」	龍王はうやうやしくみずから出むかえて、
直至宮裡相見，上坐獻茶畢，問道：「上仙幾時得道？授何仙術？」	「わたくしへの御用は？」
悟空道：「我自生身之後，出家修行，得一個無生無滅之體。」	
近因教演兒孫，守護山洞，奈何沒件兵器。久聞賢鄰享樂瑤宮貝闕，必有多餘神器，特來告求一件。」	「うむ、おれが使うんだが、おれに似あわしい武器がないかと思つてね、實は無心に參上したんだ」 悟空はすましてそう答えた。
龍王見說，不好推辭，即著鱖都司取出一把大桿刀奉上。	龍王は心のなかで、「これは厄介なやつがやつて來たものだ」と思つたが、うわべは、わざと嬉しそうな顔をして、「それはそれは、よくこそ、いらつしやいました」とさつそく家來を呼んで、大きな刀を持つてこさせた。
悟空道：「老孫不會使刀，乞另賜一件。」	悟空は手をふつて、「そんなのはだめだ。輕すぎる」
龍王又著鮑太尉鱧力士，擡出一桿九股叉來。	「これが輕いんですつて！それなら」 と龍王は、重さ三千六百斤の九股叉と
悟空跳下來，接在手中，使了一路，放下道：「輕，輕，輕，又不趁手。再乞另賜一件。」	
龍王笑道：「上仙，你不曾看，這叉有三千六百斤重哩。」	
悟空道：「不趁手，不趁手。」	
龍王心中恐懼，又著鯁提督、鯉總兵擡出畫桿方天戟。那戟有七千二百斤重。	重さ七千二百斤の方天戟という武器を持つてこさせたが、

悟空接在手中，丟幾個架子，撒兩個解數，插在中間道：「也還輕，輕，輕。」	悟空は、「まだ軽い、軽い」といつて満足しない。
老龍王一發害怕道：「上仙，我宮中只有這根戟重，再沒甚麼兵器了。」	そこで龍王は、「もうこれ以上、重いものはありません」
悟空笑道：「古人云：『愁海龍王沒寶』哩！你再去尋尋看，若有可意的，一一奉價。」	「本當にないか？」
龍王道：「委的再無。」	
正說處，後面閃過龍婆、龍女道：「大王，觀看此聖，決非小可。我們這海藏中，那一塊天河定底的神珍鐵，這幾日霞光艷艷，瑞氣騰騰，敢莫是該出現，遇此聖也？」	「あ、そういえば、ただ一つ、
龍王道：「那是大禹治水之時，定江海淺深的一個定子，是一塊神鐵，能中何用？」	むかし大洪水のとき、大禹さまが、おつかいになつた鐵の棒がのこつています。なんでも水の深い浅いをはかつたものさしだそうです」
龍婆道：「莫管他用不用，且送與他，憑他怎麼改造，送出宮門便了。」	
老龍王依言，向悟空說了。	
悟空道：「拿出來我看。」	「じゃ、それを見せてもらおう」
龍王搖手道：「扛不動，擡不動，須上仙親自去看。」	
悟空道：「你引我去。」	
龍王引至海藏中間，忽見金光萬道。	龍王の案内で、藏の中にはいると、長さ二丈あまりのふと い鐵の棒が、金色の光を放つている。
龍王指道：「那放光的便是。」	
悟空擦衣上前，摸了一把，乃是一根鐵柱子，約有斗來粗，二丈有餘長。他儘力兩手撾過道：「忒粗忒長些，再短細些方可用。」	悟空は兩手でかかえてみて、「ちよつと長すぎる、それに少しふとすぎる」
說畢，那寶貝就短了幾尺，細了一圍。	とつぶやくと、みるみる棒はちぢんで、長さもふとさも、ちようど手ごろのものになつた。
悟空又顛一顛道：「再細些更好。」	
那寶貝真個又細了幾分。	
悟空十分歡喜，拿出海藏看時，原來兩頭是兩個金箍，中間乃一段烏鐵。	不思議に思つてよく見ると、黒びかりのする鐵の棒の兩はしには、黄金の箍がはめてあり、

緊挨箍有鐫成的一行字，喚做：「如意金箍棒，重一萬三千五百斤。」	それに、「如意金箍棒重さ一萬三千五百斤」と彫りつけてある。
心中暗喜道：「想必這寶貝如人意。」	悟空はすつかりよろこんで、「こいつは申しぶんない。」
一邊走，一邊心思口念，手顛著道：「再短細些更妙。」	
拿出外面，只有二丈長短，碗口粗細。	
你看他弄神通，丟開解數，打轉水晶宮裡。	
說得老龍王膽戰心驚，小龍王魂飛魄散，龜鼈黿鼉皆縮頸，魚蝦螯蟹盡藏頭。	
悟空將寶貝執在手中，坐在水晶宮殿上，對龍王笑道：「多謝賢鄰厚意。還有一說。當時若無此鐵，倒也罷了；如今手中既拿著他，身上更無衣甲相趁。	
你若有披掛，索性送我一件，一總奉謝。」	もののついでに、よろいもちようだいしよう」
龍王道：「這個卻是沒有。」	「よろいは持つておりません」あきれながら龍王が答えると、
悟空道：「一客不犯二主。若沒有，我也定不出此門。」	
龍王道：「煩上仙再轉一海，或者有之。」	
悟空又道：「走三家不如坐一家。千萬告求一件。」	
龍王道：「委的沒有，如有即當奉承。」	
悟空道：「真個沒有？就和你試試此鐵！」	悟空は貫つたばかりの如意棒を、今にもふりまわしそうなけはいをみせて、「ちようだいできぬうちは、てこでも動かん」とわめいた。
龍王慌了道：「上仙，切莫動手，待我看舍弟處可有，當送一副。」	東海龍王は弱りはてて、
悟空道：「令弟何在？」	
龍王道：「舍弟乃南海龍王敖欽、北海龍王敖順、西海龍王敖閏是也。」	弟の、南海、北海、西海の、
悟空道：「我老孫不去，不去。俗語謂『賒三不敵見二』，只望你隨高就低的送	

一副便了。」	
老龍道：「不須上仙去。我這裡有一面鐵鼓、一口金鐘，凡有緊急事，搥得鼓響，撞得鐘鳴，舍弟們就頃刻而至。」	
悟空道：「既如此，快些去搥鼓撞鐘。」	
真個霎時，鐘鼓響處，果然驚動那三海龍王，須臾來到。	三龍王を呼びよせ、
<p>敖欽道：「大哥，有甚緊事，搥鼓撞鐘？」老龍道：「賢弟，不好說。有一個花果山甚麼天生聖人，早間來認我做鄰居。要一件兵器，獻鋼叉嫌小，奉畫戟嫌輕；將一塊天河定底神珍鐵，自己拿出，丟了些解數。如今坐在宮中，又要索甚麼披掛。我處無有，故響鐘鳴鼓，請賢弟來。你們可有甚麼披掛，送他一副，打發他出門去罷了。」</p> <p>敖欽聞言，大怒道：「我兄弟們點起兵拿他不是？」</p> <p>老龍道：「莫說拿，莫說拿。那塊鐵，挽著些兒就死，磕著些兒就亡。」</p> <p>敖閏說：「二哥不可與他動手。且只湊副披掛與他，打發他出了門，啟表奏上上天，天自誅也。」</p>	相談をした結果、
敖順道：「說的是。我這裡有一雙藕絲步雲履哩。」	蓮の糸で織つた步雲ぐつ、
敖閏道：「我帶了一副鎖子黃金甲。」	金くさりのよろい、
敖欽道：「我有一頂鳳翅紫金冠哩。」	鳳凰の羽かざりのある紫金のかぶとを、
老龍大喜，引入水晶宮相見了，以此奉上。悟空將金冠、金甲、雲履都穿戴停當，使動如意棒，一路打出去，對眾龍道：「聒噪，聒噪。」四海龍王甚是不平，一邊商議進表上奏不題。	それぞれの龍王から贈ることにした。悟空は大満足で、これらのものを身につけ、
這猴王，分開水道，徑回鐵板橋頭，攬將上去。	ふたたび水をくぐつて水簾洞へ歸つて來た。

<p>只見眾猴，都在橋邊等候。忽然見悟空跳出波外，身上更無一點水濕，金燦燦的走上橋來。</p>	<p>家來の猿たちは、まばゆいばかりのすがたをみて、</p>
<p>說得眾猴一齊跪下道：「大王好華彩耶！」</p>	<p>もの珍らしそうにさわぎたてたが、</p>
<p>悟空滿面春風，高登寶座，將鐵棒豎在當中。</p>	<p>ふと大きな如意棒をみつけて、</p>
<p>那些猴不知好歹，都來拿那寶貝，卻便似蜻蜓撼鐵樹，分毫也不能動。</p>	<p>みんなで持ちあげようとするが、少しも動かない。</p>
<p>一個個咬指伸舌道：「爺爺呀！這般重，虧你怎的拿來也！」</p>	<p>「こんな重いものを」と不審そうに悟空を見あげると、</p>
<p>悟空近前，舒開手，一把擡起，對眾笑道：「物各有主。這寶貝於海藏中，也不知幾千百年，可的今歲放光。龍王只認做是塊黑鐵，又喚做天河鎮底神針。那廝們都扛擡不動，請我親自去拿。那時此寶有二丈多長，斗來粗細。我意思嫌大，他就小了許多；再教小些，他又小了許多，上有一行字，乃『如意金箍棒，一萬三千五百斤』。你都站開，等我再叫他變一變看。」</p>	<p>悟空は笑いながら、</p>
<p>他將那寶貝顛在手中，叫：「小！小！小！」</p>	<p>「ちぢまれ」と棒に命じた。</p>
<p>即時就小做一個繡花針兒相似，可以摑在耳朵裡面藏下。</p>	<p>すると棒は見ているうちにちぢまつて、ぬい針くらいの、大きさになつたから、</p>
<p>眾猴駭然道：「大王，還拿出來耍耍。」</p>	<p>猿たちはものもいえずに、たまげている。</p>
<p>猴王真個去耳朵裡拿出，托放掌上叫：「大！大！大！」即又大做斗來粗細，二丈長短。他弄到歡喜處，跳出洞外，將寶貝摺在手中，使一個法天像地的神通，把腰一躬，叫聲：「長！」他就長的高萬丈，頭如泰山，腰如峻嶺，眼如閃電，口似血盆，牙如劍戟；</p>	<p>悟空は鼻をうごめかして、</p>
<p>手中那棒，上抵三十三天，下至十八層地獄。</p>	<p>「のびれば上は三十三天にいたり、下は十八層地獄に及んで、天地のあいだをつらぬき、</p>
<p>把七十二洞妖王，都說得磕頭禮拜，戰</p>	

戰兢兢。	
霎時收了法像，將寶貝還變做個繡花針兒，藏在耳內，復歸洞府。	ちぢまればわずか一二分となつて、耳の中にもはいつてしまふ」と如意棒の由來をとききかせた。
慌得那各洞妖王，都來參賀。此時遂大開旗鼓，依前教演。猴王將那四個老猴封為健將，兩個赤尻馬猴喚做馬流二元帥，兩個通背猿猴喚做崩芭二將軍。將那安營下寨、賞罰諸事，都付與四健將維持。他放下心，日逐騰雲駕霧，遨遊四海，廣交豪傑。此時又會了個七弟兄，乃牛魔王、蛟魔王、獅魔王、獅狻王、獼猴王、獨狻王，連自家美猴王七個。日逐講文論武，走斝傳觴，朝去暮回，無限快樂。	
一日，在本洞安排筵宴，請六王赴飲，吃得酩酊大醉。	ある日、悟空は腹心の部下と共に酒もりをしていたが、すっかり酔っぱらつて、
送六王出去，敲在鐵板橋邊松陰之下，霎時間睡著。	松の木の根もとに寝こんでしまった。
四健將領眾圍護，不敢高聲。	
只見那美猴王睡裡，見兩人拿一張批文，上有「孫悟空」三字，走近身，不容分說，套上繩，就把美猴王的魂靈兒索了去，踉踉蹌蹌，直帶到一座城邊。	すると夢の中に、二名の男があらわれて、何やら手に、紙きれを持っている。何げなく見ると、その紙には、「孫悟空」と書いてある。ふしぎに思つて、立ちあがろうとすると、いきなり悟空をつかまえて繩をかけ、大きな城の前へつれていつた。
猴王漸漸酒醒，忽擡頭觀看，那城上有一鐵牌，牌上有三個大字，乃「幽冥界」。	悟空は酒のよいもさめはてて、頭をもたげてよくよく見ると、城の門の上の、鐵の額には、「幽冥界」と大きな三つの文字が書かれている。
美猴王頓然醒悟道：「幽冥界乃閻王所居，何為到此？」	「幽冥界、幽冥界と、いえば、閻魔のいるところだが、なんでまた、このおれを、つれて來たんだ？」悟空は尋ねると、
那兩人道：「你今陽壽該終，我兩人領批，勾你來也。」	二名の男は、「お前の壽命が盡きたのさ」
猴王聽說，道：「我老孫超出三界之外，不在五行之中，已不伏他管轄，怎麼朦朧，又敢來勾我？」	「ばかなつ、おれは地の變化七十二とおりをおぼえ、生死をこえた身だ。絶対に死ぬはずはない」
那兩個勾死人，只管扯扯拉拉，定要拖他進去。	

那猴王惱起性來，耳朵中掣出寶貝，幌一幌，碗來粗細。	悟空が怒つて満身に力をこめると、繩はプツリときれた。たちまち耳から、ぬい針ほどの如意棒を取りだし、ひとふりふつて大きくしたかと思うと、
略舉手，把兩個勾死人打為肉醬。	もうふたりの地獄の使を叩きつぶしていた。
自解其索，丟開手，輪著棒，打入城中。	それでも腹のおさまらぬ悟空は、如意棒を水ぐるまのようにまわして、閻魔の城中にあばれこみ、
諛得那牛頭東躲西藏，馬面南奔北跑。	あたるを幸い、牛頭馬頭や赤鬼青鬼を片つぱしからやつつけた。驚いたのは、あまたの鬼たちで、(氣の強い、亡者もあるものだ、これは地獄はじまつて以來の珍事)とあわてふためいて逃げまわる。
眾鬼卒奔上森羅殿，報著：「大王，禍事！禍事！外面一個毛臉雷公打將來了。」	
慌得那十殿冥王急整衣來看，見他兇惡，即排班高叫道：「上仙留名！上仙留名！」	このさわぎに、何ごとかと閻魔大王もすがたをあらわした。
猴王道：「你既認不得我，怎麼差人來勾我？我本是花果山水簾洞天生聖人孫悟空。你等是甚麼官位？快報名來，免打。」	見るより早く、悟空は、「やい、おれは天生聖人孫悟空というものだ。
十王躬身道：「我等乃秦廣王、楚江王、宋帝王、忤官王、閻羅王、平等王、泰山王、都市王、卞城王、轉輪王。十殿冥王是也。」	
悟空道：「汝等既登王位，乃靈顯感應之類，為何不知好歹？」	
我老孫修仙了道，與天齊壽，超昇三界，跳出五行，為何著人拘我？」	おれの壽命は天と同じく不滅のはず、それを、なに血まよつて呼びよせたのか？」と今にも打つてかかろうとするので、大王もあきれはてて、とつきの逃げ口上に、
十王道：「上仙息怒。普天下同名同姓者多，敢是那勾死人錯走了？」	「たぶん人ちがいでござろう」
悟空道：「胡說！胡說！常言道：『官差吏差，來人不差。』你快取生死簿子來看！」	「よし、それなら壽命の帳面を持つて來て見せてくれ」
十王聞言，即請上殿查看。	
悟空執著如意棒，徑登森羅殿上，正中間南面坐下。	

<p>命掌案的判官取出文簿來。</p>	<p>やむなく大王は、係の判官に命じて、森羅殿から大事な帳簿をかかえさせてくる。</p>
<p>十類中、逐一查看：羸虫、毛虫、羽虫、昆虫、鱗介之属、俱無他名。又看到猴屬之類，原來這猴似人相不入人名；似走獸，不伏麒麟管；似飛禽，不受鳳凰轄。</p>	<p>あれでもない、これでもない、とひつくりかえしたあげく、</p>
<p>另有個簿子，悟空親自檢閱，直到那「魂」字一千三百五十號上，方注著孫悟空名字，乃「天產石猴，該壽三百四十二歲，善終」。</p>	<p>猿の部類の一千三百五十番目、見ると自分の名が書いてある。 ——「孫悟空。天生の石猿。壽誕三百四十二歳。善終」</p>
<p>悟空道：「我也不記壽數幾何，且只消了名字便罷。」取筆過來，飽搥濃墨，把猴屬之類，但有名者，一概勾之，摔下簿子道：「了帳，了帳，今番不伏你管了。」一路棒，打出幽冥界。</p>	<p>(ははあ、これだな)とうなずいた悟空は、係の役人の持っている硯の箱から筆を取りあげ、たつぷり墨汁をふくませて、力まかせにベタベタと自分の名のあたりを塗りつぶした。ついでに同じ仲まの猿の名にもみんな棒をひき、「これでよかろう」と</p>
<p>那十王不敢相近，都去翠雲宮，同拜地藏王菩薩，商量啟表，奏聞上天。</p>	
<p>這猴王打出城中，忽然絆著一個草紆縫，跌了個躑躅，猛的醒來，乃是南柯一夢。</p>	<p>上機嫌で城を出たかと思うと、ふつと眼がさめた。気がつくともやはり自分は松の木の下に眠っている。が、どう考えてもただの夢とは思われない。(おれの魂がきつとおれにかわつて、幽冥界に行つたのであろう)と</p>
<p>才覺伸腰，只聞得四健將與眾猴高叫道：「大王，吃了多少酒，睡這一夜，還不醒來？」</p>	
<p>悟空道：「睡還小可，我夢見兩個人來勾我，把我帶到幽冥界，卻才醒悟。是我顯神通，直嚷到森羅殿，與那十王爭炒，將生死簿子看了，但我等名號，俱是我勾了，都不伏那廝所轄也。」</p>	<p>仲まの猿たちを呼んで、夢ものがたりをすると、</p>
<p>眾猴磕頭禮謝。自此，山猴多有不老老，以陰司無名故也。美猴王每日聚樂不題。</p>	<p>「それはめでたい、めでたい」とみんなはお祝いのことばをのべた。</p>
<p>卻說玉皇上帝，一日駕坐金闕雲宮靈霄寶殿，聚集文武仙卿早朝之際，忽有丘弘濟真人啟奏道：「萬歲，通明殿外有東海龍王敖廣進表，聽天尊宣詔。」</p>	<p>ある日、天上の玉皇上帝が、靈霄殿に、お出ましになると、東海龍王から、</p>
<p>玉皇傳旨：「著宣來。」</p>	

敖廣宣至殿下，禮拜畢，引奏仙童接上表文。	
表曰：「水元下界東勝神洲東海小龍臣敖廣啟奏大天聖主玄穹高上帝君：	
近因花果山水簾洞妖仙孫悟空者，欺虐小龍，強坐水宅，索兵器，要披掛。臣敖廣等獻神珍之鐵棒，鳳翅之金冠，與鎖子甲、步雲履，以禮送出。他仍弄武藝，顯神通，施法施威，逞兇逞勢，甚為難制	「花果山水簾洞のばけもので、孫悟空と申すもの、龍宮にあばれこみ、力をたのんで武器をうばい、その上、大ぜいの魚族を傷つけました。
伏望聖裁乞遣天兵，收此妖孽，庶使海嶽清寧，下元安泰。謹奏。」	どうぞ一日も早く天兵をくだして、このばけ猿を御征伐くださいますよう」との上奏があつた。
聖帝覽畢，傳旨：「著龍神回海，朕即遣將擒拿。」	玉帝が驚いておられると、
老龍王頓首謝去。	
下面又有葛仙翁天師啟奏道：	
「萬歲，有冥司秦廣王賚奉幽冥教主地藏王菩薩表文進上。」	またまた閻魔大王が、うやうやしく御前にあらわれて、
傳言玉女接上表文。	
表曰：「幽冥境界，乃地之陰司。天有神而地有鬼，陰陽輪轉；禽有生而獸有死，反復雌雄。此自然之數也。	
今有花果山水簾洞天產妖猴孫悟空，逞惡行兇，不服拘喚。	「花果山水簾洞におります天産のばけ猿、孫悟空。實に性、兇惡なるやつにて、
弄神通，打絕九幽鬼使；恃勢力，驚傷十殿慈王。大鬧森羅，強銷名號。	森羅殿にはいりこみ、たいせつな壽命簿に墨をなすりつけました。
致使猴屬之類無拘，獼猴之畜多壽；寂滅輪迴，各無生死。貧僧具表，冒瀆天威。	
伏乞調遣神兵，收降此妖，整理陰陽，永安地府。謹奏。」	何とぞ、こやつを御退治くださいますよう、お願いいたします」と申しあげた
玉皇覽畢，傳旨：「著冥君回歸地府，朕即遣將擒拿。」	そこで玉帝は、ひとまずふたりを引きとらせてから、
秦廣王亦頓首謝去。	
大天尊宣眾文武仙卿，問曰：「這妖猴是幾何產育，何代出身，卻就這般有道？」	文武百官に、「いつたい、この猿はどういう者か？」とおたずねになつた。

班中閃出千里眼、順風耳道：「這猴乃三百年前天產石猴。當時不以為然，不知這幾年在何方修煉成仙，降龍伏虎，強銷死籍也。」	
玉帝道：「那路神將下界收伏？」	
言未已，班中閃出太白長庚星，俯伏啟奏道：「上聖，三界中凡有九竅者，皆可修仙。」	すると太白星がうやうやしく口をひらいて、「申しあげます。」
此猴乃天地育成之體，日月孕就之身，今既修成仙道，有降龍伏虎之能，與人何異？	この者は、天地を父母として生まれ、のち、神仙の道をおさめましたもの、征伐をなさいますよりも、
臣啟陛下，可念生化之慈恩，降一道招安聖旨，把他宣來上界，授他一個大小官職，拘束此間。若受天命，再行陞賞；若違天命，就此擒拿。一則不動眾勞師，二則收仙有道也。」	よくみちびいてやれば、その方がいつそ、よろしかろうかと存じます」
玉帝甚喜，道：「依卿所奏。」	帝は、この意見をお取りあげになつて、
即著文曲星官修詔，著太白金星招安。	さつそく太白星を使者として、おつかわしになつた。
金星領旨，出南天門外，按下祥雲，直至花果山水簾洞，對眾小猴道：「我乃天差天使，有聖旨在此，請你大王上界。快快報知。」	悟空は、ある夜、大空の金星が異様にまたたき、しかも、次第に下界に近づいてくるのを見て、(奇妙なこともあるものだ)と思つていと、
洞外小猴一層上傳至洞天深處，道：「大王，外面有一老人，背著一角文書，言是上天差來的天使，有聖旨請你也。」	キラキラと輝く金星は、悟空の前で、たちまち太白星老人のすがたにかわつた。
猴王大喜，道：「我這兩日正思量要上天走走，卻就有天使來請。」叫：「快請進來。」	
猴王急整衣冠，門外迎接。	
金星徑入當中，面南立定道：「我是西方太白金星，奉玉帝招安聖旨，下界請你上天，拜受仙籙。」	悟空は、玉帝のお召しを聞くと、
悟空笑道：「多感老星降臨。」	とびあがつてよろこび、
教小的們安排筵宴款待。	
金星道：「聖旨在身，不敢久留。就請同往。」	
悟空即喚四健將，分付：「謹慎教演兒	

孫，待我上天去看看路，卻好帶你們上去也。」	
四健將領諾。	
這猴王與金星縱起雲頭，昇在空霄之上。	太白星にしたがって天上界へのぼつて行つた。
正是那：高遷上品天仙位，名列雲班寶籙中。	
畢竟不知授個甚麼官爵，且聽下回分解。	